

歌の周辺

大学卒業と同時に結婚し、市川市の国府台に近い木造アパート「根本荘」に住んだ。二年後、長女が生まれた。赤ちゃんは目覚めてから泣くのではなく、目覚めながら泣く。つまり感情で泣くのではなく、生命そのものが泣き声をあげるのだ、と知って新鮮な気持ちになった。

そのころわが部屋の窓辺に木箱きばこを置き、土を盛って朝顔を育てた。みどりごが北半球の一点・根本荘で泣きながら目覚めると、窓辺に咲いた白い朝顔の花が涼しげに見守っていた。六畳の部屋、四畳半の部屋、小さな台所——それだけの慎ましいアパート生活だった。

(高野公彦)



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・17

みどりごは泣きつつ目ざむひえびえと
北半球にあさがほひらき

——『汽水の光』

【鑑賞】みどりごが泣き、あさがおのひらく夏朝である。あさがおの景として大きすぎる北半球に驚くが、三句「ひえびえと」に留意したい。冷やかかなこの辞句が一首を領し、あさがおも、みどりごも、北半球さえも冷やして、命の質をただすのだ。生活の光景でありながら、一首に特質を帯びた詩精神を見るのは、「ひえびえと」の措辞からのように思われる。

(原賀環子)



ふるさとコレクション——188

盾形銅鏡（富雄丸山古墳 奈良市丸山）

類例のない盾形銅鏡と国内最大の鉄剣が見つかった、国内最大の円墳の富雄丸山古墳。築造された時代は、中国の史書に日本に関する記述のない「空白の4世紀」と呼ばれ、被葬者もわかっていない。富雄丸山古墳は、わが家から300メートルあまり東にある。

2023年1月28日午前、一般公開に先だち地元優先の現地説明会に参加。富雄丸山古墳の発掘調査（第6次）でアッと驚かされる、古墳時代の最高傑作の盾形銅鏡が目の前で見られた。テントの下の机の上の盾形銅鏡は、長さ約64センチ、幅約31センチ。盾形銅鏡の裏面には神像や靈獣をあしらった精緻な円形文様などが表現されている。また中央に突起状の鈕という紐ちゆうを通す穴まで見えた。鏡の表はつるりとして、ここにも模様が表現されている。

鉄剣は保存処理中で出土品は見られなかったが、原寸大パネルによると全長約267センチ、蛇行剣と記されている。

盾形銅鏡と鉄剣は「造り出し」部分の埋葬施設の粘土槨かくから出土。その出土現地にたたずみ、被葬者を誰だろうかと思う。

（写真・解説 川村 秀子）